

巻頭言

開発スピードが雌雄を決する

Speed of development determines winner

執行役員常務

川村 昌史

Shoji KAWAMURA



開発のスピードが重要とはよく言われることですが、昨今このスピードが一段と加速してきています。ハードからソフト、サービスへ開発の重点が移行したことが大きな影響を与えていていると思います。当社は従来ハードをビジネスの中心に置き、自動車メーカーとともにじっくりと品質を作りこむのに専念していました。これはこれで重要なことですが、ソフト、サービスが主流となってきた社会の潮流に乗り遅れそうになってきているのも事実です。

パソコンのアプリケーション開発者（中学生か高校生だったと思います）が面白いアプリケーションを思いつき、一日で開発しWeb上のマーケットに登録したら一週間で数千ものダウンロードがあったという話を聞いたことがあります。これは極端な例ですが、ソフトビジネスのスピード感はこのようなものです。

ハード開発においても、自動車は2～4年周期ですがパソコンやスマートフォンは3ヶ月～半年で廻っています。情報化の進展に追従するにはハード、ソフトとも開発のスピードが要求され、ついていけないものは振り落とされることになります。

車載情報機器メーカーである当社は、自動車と一般情報機器の狭間にあり非常に難しい対応を求められています。開発のスピードを上げないとスマートフォン等に取って代わられ、自動車の要求品質を満たさないと自動車メーカーに見放されることになります。品質を担保しながら開発をスピードアップさせるという2つの命題を解決する必要があります。

解決の方向性として品質の捉え方を再考することが考えられます。自動車の本質である走る、曲がる、止まるに関する品質と情報系に関する品質の捉え方です。本質部分については再考の余地がないと思いますが、情報系については自動車メーカーと議論する価値があると考えます。

もちろん車の運転に支障をきたすような不具合は論外ですが、様々な通信メディアを通じて車に送り込まれる全ての情報データの品質を担保するのは不可能です。かといって品質を重視するあまり強力なフィルタリングを掛けると情報の価値、量の低下を招きます。ユーザーに納得して頂けるうまいエクスキューズ手段を考える必要があると思います。品質改善のためのハードバージョンアップは難しいですが、ソフトのバージョンアップは通信メディアを使い自動的に行うことも可能になってきました。ユーザーに違和感を持たせずにバージョンアップを行うアイデアが重要です。

開発のスピードを上げるためにまずは拡張性の高いプラットホームをしっかりと作ることです。拡張性としてはスケーラブルなCPUやメモリの選択、ソフト的には将来を見越したAPIの多様性だと思います。

ソフト、サービスの重要度が飛躍的に上がった現在において、サービス機能アプリケーションの開発スピードを上げることが最重要です。サービス開発にはICTが重要ですが、閃きの部分も無視できません。電話の特許はグラハム・ベルとエリシャ・グレイがほぼ同時（ベルが約2時間早かった）に申請したことは有名です。世界中に同じような発想をする人は大勢います。いかに早くアイデアを具体的な開発に移し、世に出すかが勝敗を分けます。お客様に感動を与えるサービスを全社一丸となってスピーディに開発することを期待します。

川村昌史